岐阜新聞真学塾

出題　螢雪ゼミナール　大垣駅前校・築樋拓真

問題【国語】

次の虫に関することわざ、慣用句の意味を答えましょう。

（１）飛んで火に入る夏の虫

（２）蓼食う虫も好き好き

（３）虫の居所が悪い

豆知識 雑学コラム　ムシできない ことわざ

今年も蝉の鳴き声がする季節が近づいてきました。日本人は昔から虫に対して特別な思いを持って見てきました。古文の世界でも、藤原道綱母が自らの儚い人生を虫のカゲロウに例えて名付けた「蜻蛉日記」の様に虫に関わりある作品はたくさんあることからも、日本人の虫への関心が見て取れると思います。また、ことわざや慣用句にも虫が出てくるものが多くあります。今日はそんな虫に関することわざ、慣用句を見ていきましょう。

まずは「飛んで火に入る夏の虫」です。これは明るさにつられて飛んできた夏の虫が火で焼け死ぬことから、自ら進んで災いに飛び込むことを例えた言葉です。今では街灯なので飛んで行っても虫は死ぬことはありませんが、昔は松明（たいまつ）など火を明かりにしていたため、火に飛び込んで死んでしまっていたのですね。科学技術の進歩で松明が電気に変わって行く中で、人間だけでなく虫にとっても生きやすい世の中になっているのですね。

次は「蓼食う虫も好き好き」です。「蓼」とは、お刺身の盛り合わせの横によくついている紫色の小さな葉っぱのことです。この葉っぱはピリッと辛い味がします。多くの虫には辛くて食べられないこの蓼を好んで食べる虫もいることから、人の好みは様々で一概には言えないという意味の言葉になります。

最後は「虫の居所が悪い」です。これは中国発祥の道教が元となった言葉です。道教では、人の身体の中には３匹の虫が居て、その虫が人の身体や心に影響を与えていると考えられていました。それが日本に伝わり、機嫌が悪いのは体の中の虫が変なところにいるためだということで、機嫌が悪く怒りやすい状況を「虫の居所が悪い」という様になりました。「腹の虫がおさまらない」も同じように、お腹の虫が人の心に影響を与えているという考えから出てきた言葉になります。

今回は「虫」に関することわざや慣用句を見てきました。他にも「泣き虫」や「勉強の虫」など虫に由来する言葉はたくさんありますよね。こうして見てみると、一つ一つは虫の様に小さな言葉でも無視できないですね。

【解答】

（１）自ら進んで災いに飛び込むこと

（２）人の好みは様々で一概には言えないこと

（３）機嫌が悪く、怒りやすい様子